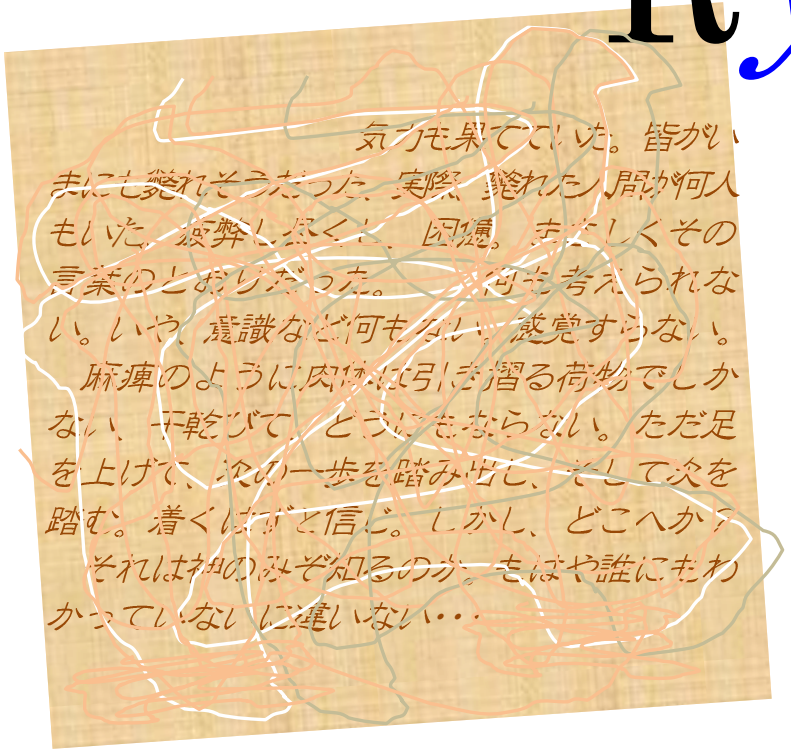
Ryuexjgeu X

リュージュ

Siveeyeah 著



（『ある兵士の手記』原本の写真）

あらゆる論議は尽くされたが、ただ言葉丈（だけ）が残った。会議録を眺めても、これで現状を変えられると思う者は誰もいないだろう。

いや、もし変えられたとしても、結局は同じことが繰り返されるのだ。人間の習性は変わらない。それ以外の在り方ができない、いや、在り方が他にない。

まるで球体の中に閉じ込められているかのよう。奔れども走れども、逝き着かず、どのくらい奔ったかすら見当もつかない。周囲を見渡せども、眼眩めくばかりで上も下もわからず、いまどちらを向いているのかさえ定かではなく、前後すら知りようもなく、どっちが自分の右か左かさえも判別できない。

只管（ひたすら）疾駈し続けている感覚しかない。眩暈のような嘔吐感。この名状しがたく言い知れない、気の狂いそうな、感覚も牽き裂けるかのような、自らが引き伸ばされ失せ無みされるかのような底知れぬ無限、真空の純粋さの過剰に炸け裂けるかのような

表現ができない。何を言おうが、何をしようが所詮『言葉（記号）』に過ぎない。無力だ。空疎だ。木偶だ。言葉や考概という存在自体が虚ろな、空っぽな、実体も本質もない、形骸でしかないからだ。そうと想い至る。

「薔薇とは何か」「薔薇の特徴を備えた花でございます」「なぜ、それが薔薇なのか」「特徴とは存在者の特性を顕すものだからです。薔薇の特性を持った存在者、それが薔薇です」「薔薇の特性とは何か？　そのフォルムはいかように定められた？　なぜその特性があると薔薇なのか？　その設定はいかように」「それはもう実物を眺めて、触れて、嗅いで、又は裂いて戴いて、これが薔薇というもの（＝薔薇の特性）だと直截理解して戴くしかありません。いまも申しましたとおり、薔薇の特性を持った存在者を薔薇と言うと決まっておりますもので」「それは経験を擦り込んだ丈だ。なぜそれ丈で薔薇だと言えるのか」「さあて。知識とはそういうものなのです」「特性とはどういうことか？　なぜ特性

とやらを持った存在者は特性に対応した『〇〇』であることになるのか」

「それはもう、いにしえよりさよう決まっておりますもので」「それは答にならない。薔薇の本質（自性）は睿らかにされなかった。もしそれがないなら、それは現象に過ぎない。傀儡だ。認識を惹き起こすための或る種の策動、脳に与える一定の効果でしかない」「……」

薔薇は薔薇ではなく、「薔薇」でしかなく、畢竟、インパルスがニューロンを廻っている丈に過ぎない、声帯が空気を震わせている丈に過ぎない。そのことがいったい何だというのか。可も不可も是も非もない。

むろん、会議でこのような抽象論が論じられていたわけではない。もっと世俗的な議題であった。意見が大いに分かれて紛糾し、大議論に発展した、というわけでもない。大まかに言えば各国の考えは皆同じである。大きな視点から見れば利益が共通しているからだ。しかし具体的な、実務的な段階になると、各国及び各人の様々な思惑があり、一向に妥協や解決の糸口が見えない。

しかも誰もが欲望の渦の弩真ン中にどんっと居坐りながらも、誰もが清らかな涼しい顔をしていて、自国の利益や自分の資産・名誉など考えたこともないような風を装っている。

常に「正義の名に於いて」又は「法の定めるところに拠れば」或いは「国家の尊厳を」さらには「全体の幸福及び国際連盟の大義に基づいて」などなど延々繰り返す。

かようにしていつも多くの諍いを起こし、失敗を重ね、様々に制度や体制を案出し、条約を批准するが、必ず巧みな抜け道が案出され、関係者同士の闇の中で密約が批准され、毎度毎度飽きもせず愚劣者どもは同じ所に還る。醜く汚いこと極まりない。汚穢物生芥（おえぶつなまごみ）以前の存在。

権力者や富豪から私利私欲がなくなる日はない。誰もが囚われ、これに打ち破られる。魂魄の軟弱者だ。今回も亦復（またまた）欲得の〝娑婆〟に返り咲いてしまうのであろう。政治もイデオロギーも法も国家も、善に見せかけるためのパッケージングに過ぎない。偽装だ。

議長が木槌でテーブルを叩き、

「外国の傭兵は認めないということで宜しいか。

では中断する前にここまでの意見をまとめよう。

『各国は資金を拠出し、直截傘下の兵か又は連盟国内の傭兵を用意し、彼らが国境の通過を許し、通過する軍物資に税を課さず、情報を隠さず、共有する。

なお、原則的に聖域を設けず、拒否権はないが、非常緊急なる昨今の情勢であっても、国家の尊厳及び主権は冒されず、実情が配慮されるべきとする』と。

宜しいか？　余はこれを条約の基礎とすべきという答申案で本会義がまとまりつつあるものと認識する。

会議はいったん休憩とし、再開の後はこの基礎を基本指針として委員会に答申するかどうか採決を取る」

実効性が危ぶまれる内容であった。またいつものように最も影響力のある国が遵守せず、批准された条約に基づいて賦課された出資金は拠出されず、出兵の義務は守られず、関税を廻って各国内の農工商の大富豪から反発が上がって物資は滞り、情報は隠蔽されるのである。武器や物資の密輸や裏取引は横行し、賄賂もなくならないが、正当で正規の約束は守られない。恥知らずの愚連隊ども。臆病者、阿諛追従者、死に値する魂の弱者。

賄賂を取る人間は無条件に抹殺すべきである。裁判で良民の税を使うのはもっての外だ。なぜ人の権利を踏み躙る者の権利を守るのか。いにしえの聖人仏陀がいみじくも言ったように「人の価値は行為で決まる」べきである。

とすれば悪人には生命の尊厳も人権もない。そのように理解し、実行しなければ善人の生命の尊厳及び人権が失われる。二兎は得られない。二つあるなら一つを択ばなければならない。これは是非を論ずるまでもない現実の法則である。実在する法則である。

余談だが、時折、悪魔の侯爵デヴィル・アスタロテが彼を訪れ、次のように囁くことがある。

「リュージュよ、おまえたちは何も知らないようだが」

そう言いながら悪魔は嬉しそうに微笑む。

「賄賂を取った人間は魂が苦裂の地獄に堕ちる。愚かな者は我先に物資を奪い合い、利益を毟り剥がし合う。偽り騙してまでも金儲けをする人間は獣であり、人間ではない。人ではないのだから人権などない。無論、犬でも猿でも蛇でも蛙でも魚でもオキアミでもない。樹木でも苔でも黴ですらない。すなわち『生命』ではない。生芥と一緒に紐で縛って燃やしても差し支えない」

彼はその度に深く頷き、

「悪魔よ、あなたは正しい。人の権利を損なう者からは権利を剥奪すべきである。人権は生得権だが、永劫絶対不変の権利ではない。そうでなくては正しい者が虐げられ、幸せを踏み躙られ、努力して得たものを失う。その代わりに悪辣者が幸せに笑う世の中を造ってしまうことになる。似非人道主義者に死を与えたまえ。永劫の死を。よく言われることだが、二兎追う者は一兎を得ず。両方によいようにはできない。現実世界では不可能だ。

どちらかを選ぶしかないし、そうしなかった者は結果の責任を取るべきだ。無責任な者が多過ぎる。ひとごとだと思っていい加減な発言をして人格者ぶる知識人の何と多いことか」

悪魔は魅惑的な韜晦者の微笑を泛べ、

「ジャンバルジャンなどレアケースだ。犯罪者を容赦すべきではない。犯罪者を擁護する者は再び過ちが起こった場合は連座すべきであろう。ふふふ」

「いかにも。発言に責任は必須だ。そうしないから、口先だけの、いい加減な評論家・弁護士・議員・報道関係者どもが増殖している。犯罪者の人権を擁護したゆえに生じた被害には擁護者にも犯罪者と同じ責任がある。断固としてある。

それゆえに僕は死刑反対論者だ。もしも賛成するなら冤罪の責任を取って死ななければならない」

そして彼は再び暖炉の前で深く夢想する……

さて議長の言葉を以て会議は休憩となった。

皆がぞろぞろと出て来る。ガレオン・ガレリオン大聖堂に附属する大

学図書館に設けられた会議室の前の廊下。雑談をする者、喫煙室へ向かう者、庭園へ向かう者、聖堂内を散策する者、メールをする者など、様々であった。時刻は午後3時、古い組石造建築の中、円柱や背の高い窓が連なりならび、斜めに光が差す。

会議室の外には、気怠い、ありふれた、日常的な感覚に充ち溢れていた。埃が高い天井の下を舞いながらキラキラと落ちる。薄暗い陰翳、日差し。沈としていた。古い薫りが漂い、乾いた、どこか懐かしい、心鎮静させる臭触を鼻腔に残す。

大学教授のまとう黒衣を身に着け、長身で白髪の青年、黒髪で濃い青の将校服の青年とともに歩く。少尉は冷厳だが、学者の青い双眸は緋色の憂鬱で満たされていた。

「結局は『非』に頼むしかない。傭兵を頼まないという考えは余りに非現実だ。反対派の主張は一面的にはもっともだが、結局、連盟内の傭兵輸出国が利益のために反対しているに過ぎない。

欲望の汚濁に塗れた醜い世界だ」

柔らかく豊かな毛皮の敷かれた長い廊下でグルーム・ウイキシュペ・イハインシュタイン教授はリュージュ・イシュペクト・ノームイ少尉にそう言い、さらに次のように言葉を続けた。

「いかに哲学を問おうとも、我々はフィジカルな実存だ。渇き餓えていては思考もできないし、身肉の痛みにのたうっているときは考えなど糞喰らえと思うだろうし、恋の嫉妬に苦しんでいるときには哲学など空疎な、実感のない児戯に感じられるだろう。

力（force）の有効利用は避けられない。避けても無駄だ。

睿智こそ人間の本質だと思いたいが、世を観ればその虚しさは募るばかり。すべてが本能で、人間の睿智も植物の光合成と何ら変わらないのだ。精神も化学的現象にすぎない。一定の条件で噴出するノルアドレナリンやアドレナリン、ドーパミン、セロトニンに過ぎない。物的な現象だ。生命維持装置でしかない生命体は生命を奪う者に対して最も気遣いをする。世界を制するのは所詮暴力だ。すべての正義は屈し、人は皆、結局、金の権力か暴力の権力か、権力者の権力に靡いてしまう」

軍紋入りの黒い革の手袋を直しながら、リュージュは冷ややかな表情で応えた。

「哲学のみならず、芸術もね。所詮は科学的な認識さえも、だ。我々は古代の迷信を嗤うが、いつの日か我々の科学への信頼も迷信と嗤われる日が来るであろう。すべてはただ骸。生きている間丈の約束事として成り立つ丈の架空の類、『思い做し concept』という名の傀儡に過ぎない。傀儡であると言っても、それも『考え（概念）concept』であれば、悪いという理由は成り立つやら否やら、定かならず。ふ」

どうでもよいことと言わんばかりの眸で窓の蒼穹に眼をやる。グルーム教授は歎息しつつ、

「受想行識の縁り結ぶ現象さ。実体はない」

受とは感受、想は想起、行は構成力、識は知覚・認識。感受に基づいて想が起こり、これを構成して知覚・認識を做り為す。

「そうだね。生きるとはそういうことだ。虚しくすらない。ただ精一杯、生きてやるさ。ふ。

僕らの想いなど世間に融通する連中には非現実的な空論だと思われるだろうね」

「間違いなくね」

「だが夢を見ているのは彼らの方さ。現実が見えずに、絶えず空疎な形骸を追っている愚か者は」

「そうさ。愚かな者は不幸だね。魂に苦渋の轍を残す」

リュージュは応えずに歩き出す。グルームも何も考えず、ただ無意識に随う。

二人は沈黙のまま歩む。深く蒼古の静かさを湛える空間。廊下に置かれた樫の棚やゴブラン織の張られた黒光りする椅子、大理石の浮彫や紋章や聖人の彫刻や円柱飾りや聖典の言葉が記された壁面の飾りなど、何百年もじっとそこに在ったに違いない。

深く沈思黙考して神を想うにこれほど相応しい場所があるだろうか。ああ、こういうところに終生埋没していられたらどれほど幸せだろう。騒がしく無知蒙昧で智慧の妙味も繊細も知らず、微妙の法悦も知らぬガ

サツな世間とは何という違いだろう。奴らと交わらず、ここで清閑に隠棲できたならばどれほど幸福だろうか。リュージュはそう思わざるを得ない。

しかしそのためには司教か神官か博士か富豪か王侯貴族の家に生まれなければならない。虚しい望みだ。現実にあり得なかったものを望んで何になろう。過去はもはや存在しない。変えようもない。隠棲して静かに生きて行ける身分も天分も運命もなかったのだ。

世間に融通する意味不明な、苦役のような『生活』に携わらずには父母を養うこともできない。已むを得ないのだ。仕方がないのだ。

唐突にリュージュが言った。「寄ってもいいか」

閲覧室の前であった。笑みでグルームは了承する。

「むろん、いいさ」

室内は羊皮紙の匂いを主として古色の馨りに充たされていた。魂を陶酔させるような睿智の薫り。どんな香水よりも眼に綾で、美しい。好学の士にとっては豪奢逸楽百花繚亂豪華絢爛奢侈とはこのことだ。リュージュは思う、かようなる美を理解しない人間は屑だ。死すべき人間の絶対的な運命を省みぬ愚劣者、刹那の命ならばこのような崇高にこそ憩いを見出すべき。しかし神はさような者にさえも生存の権利を与える、いや、むしろ、そのような者ばかりが栄耀栄華を謳歌している。世を蔽わんばかりだ。癌細胞のよう世に蔓延っている。ゴキブリのように。

『すべてを虐殺したい』

リュージュは瞼を閉じ、想い泛ぶ顔を消し去ろうとする。金持ち・ギャング・政治家・投資家・王侯貴族……

消し去ってから再び周囲を眺めた。古代のレリーフのある古い樫の本棚が聳えつつ列しならぶ閲覧室。その静謐さが荘厳ですらある。

梯子で昇らなければ上段の書籍には手が届かない。さらに上に手摺付きバルコニーのような通廊があり、そこにも梯子なしでは手の届かない本棚がある。閲覧机のならぶ中央には大きな天球儀があった。天穹よ、遙かなる者よ。永遠よ。

智の殿堂という言葉が相応しい聖域。占星術、暦学。

廻りながらリュージュは皮革装丁の一冊を手にする。
「見てくれ。『悪魔の叡智学』だ。少年の頃、熱中して読んだものさ。この本は自分のような人間を肯定してくれる、少年の頃にはそう感じたものだ。
しかも権力も金も武力も使わない意志の力を説いた書だ。自分のような無力な存在であってもこれで現実を変えられるって思った。思いたかったのさ。人はいつもそんなものだ。結局自己を肯定しようと足掻き藻掻くのみだ。しかし虚しい夢なのさ。
現実は現実でしかなく、それ以上ではなく、それ以下にもならない。どんな名作も世界を変えてくれない。
いや、変革したと反駁する奴らがいる。だが大して変わってはいない。ムーヴメントはあったかもしれないが、それは時代の必然性の中の一つであって芸術がそれを巻き起こしたのではない。時代がナポレオンを創ったのであって、その逆では、けしてない」
「レフ・トルストイがそんなことを言っていたような気がする。『戦争と平和』だったかな」
「あのような偉大な作品ですら世界を変えない。変えられなかった。だがそれも当然だろう、基督や佛陀でさえも醜い人間世界を改正できなかったのだから」
「私たちはなぜ生きるのだろう」
「死にたくないからだ。それは遺伝子の中に深く刻まれている。我々は個体を存続させることを至上の命題として造られた遺伝子の乗り物だ。だがその究極の目的は種としての存続にある」
「その話は以前にも聴いたな。こうだった、
『生命体が生きること丈に執著するのであれば説明し切れないことがある。親が子のために身を犠牲にすることや恋愛のために身を滅ぼす行為などだ。それらは子孫の存続と考えたときに初めて説明が附く』
ってね」
「宇宙の意志だ。宇宙はビッグバン以降、減速するどころか加速している。拡大し続ける。だがこれもありとしあらゆる存在者がいなくては成

り立たない。生命や物質やエネルギーや空間や時間や法則だ。
なぜビッグバンが起こったかは誰にもわからない。
時間も空間も生まれる前に原因や結果などがあり得るだろうか。初めも終わりもないのだ。場所もない。いまがビッグバンだと言ってもそれは間違いではない。理由や原因があってもなくてもどうでもよい。だから起こったのだと言えなくもない……」
「何と言おうが、所詮言葉でしかない、宇宙開闢に関する問いのように、あらゆる理窟が死滅する絶対零度の地点ではどのような言説も理論も虚しいね」
「そういうことさ。間違っていないが、間違いだ。
言ってしまえば、そんな、ただそれ丈のことさ。ふ。君は軍役に就いたことがないからそのようにさらりと言うんだ。
理窟も愛も正義も戦場では手枷足枷のようなものだ。行動の邪魔になる。別に西大陸（オエステ）のように、過酷なヴォート精神になれというのではない。戦場はソリッドだ。そうじゃなければ生き残れない。理屈も愛も正義も贅肉なのさ。面倒臭くて気持ち悪い。そういう意味では戦場はクリーンだ、沙漠がクリーンだというのと同じ意味でね。血腥くて人間のすべてが否定されているが。
君は『非』を見てみるべきだ。簡単に言うが、連中はそんなに生易しい奴らじゃない。世界には殺戮兵器と言える特殊部隊がいくつかあるが、そのすべては正規軍だ。北大陸（ノルテ）では神聖シルヴィエ帝国の『屍の軍団』とアカデミアの『ムジョー』、西大陸（オエステ）のヴォート裂戦士。
『非』は彼らとは違う。『非』は金を払えばどちらの側にも附く傭兵だ。公的資金が投入され、創られた。
これは彼らの残虐行為や凄まじい戦い方、蛮行などへの非難が国に及ばないようにするための形式的手段だ。
そして東大陸（エステ）の、大華厳龍国の輸出品とも言うべき官製傭兵『非』だ。
彼らはそれぞれの理由で死を怖れない不自然な生命体だ。ウイルスの

ような非生命体的な存在だ。
神聖帝国の聖教に殉教することを至上として自らを既に命を捨てた屍であるとする『屍の軍団』。世を無常の無空と見做して何を喪うことも怖れない『クウム』。破滅裂尽の犬死こそ神義なる名誉の極致とするヴォート裂戦士。無為自然を真として一切を否定して命を惜しまない『非』。
彼らはいずれもバケモノのような存在だ。その双(ふた)つの眼を見れば既に尋常ではない。蛇の無表情で冷血な双眸の方がよほど温情味に溢れている」
「彼らを呼ぶことを全面的に賛成するのではない」
「僕もある意味では君と同じ考えだ。だがまた別の魂はこの腐敗した世が殺戮の血で血を洗う状況が見てみたくもないとも思う。ふ。
いずれにせよ、神聖シルヴィエの脅威が現実的ないま、大陸の東端にあって、最も大華厳龍国に近い我々スサヴィ侯国は『非』を呼んで『屍の軍団』に対抗するしかない。生存のためにはね。
現実は常に選択を迫る。是非はない。選択するという以外の選択肢はない。
我が国は地理的な理由でノルテの国々よりもむしろエステの国に文化的・文明的な影響を受けた。『非』を招来することは現実的な選択だ。やはりこれも是非はないんだ」
「再開後にもう一度『非』の招聘を提案する。次は必ず説得できる」
「ぼくも応援しよう。既に案は頭の中ではできているし、我が国の王にも内諾を取っている。内々で交渉もした」
「やはり何事も裏で動くことを避けられないか・・」
「現実に名称はない。ただ現実がある」
「そうか。ならばついでにもっと現実的な話を聞かせてくれ。君の腹案に従って『非』を招聘すればその報酬は莫大なものなんだろうな。それをどうクリアするつもりか」
「金の価値というものは約束事に過ぎない。世間で言うほど現実的な存在ではない。それはさて置き、その資金は借款しかない」

「ロード王国か」
「ああ。ノルテ最大の海上貿易国家だ。古代からの海洋民族で無敵の艦隊を持っている。我々の国家予算など所詮数百億イミオンに過ぎないが、彼らの方は数百兆イミオンだ」
「最近、新進気鋭のシュール帝国はどうだ。世界初の商社組織による国家だ」
「まだ信用が置けない。ゲームの性質上、選択を間違うことはできない。大胆さと繊細さとの処方のレシピには絶妙の名人技を必要とするゲームだ。そこに大義はない。ただ成功丈が求められる。無味乾燥で、非情なものさ」
「シルヴィエが妨害しないだろうか」
「既に情報は洩れるという想定で動くのが定石だろうな。二重スパイでも何でもやるつもりだ。くだらないとは思いながらやるべきことはやるのさ。軍人として金を貰っているからな。ふ」
「では議決した際は、その後の武勲を祈るよ。君は実戦部隊だが、私は理論家だ。祈るよとしか言えない」
「人は努力してもさらに祈るべきなのさ。それですべてをやり尽くしたと言える。
祈りも努力の一つだ。やれることのすべてをやるとは祈ることをも含む。努力し尽くし、なおかつ祈ることが、為すべきことをすべて為したということになるのだ。
睿智を尽くし、もはや信じて進むしかない。迷わず、堂々果敢に行動するしかない。
気概が状況を変えないとも言えないしね」
「気概か・・・」
「この世は意志だ。意志がなぜあるのか考えれば、いや、言い方を変えよう、意志の起源を空想すれば、気概を云々することは、必ずしも気休めではない。
そう思えば『諸悪莫作（しょあくまくさ。あらゆる悪を為す莫れ）衆善奉行（しゅぜんぶぎょう。諸々の良いことを心を込めて為せ）自浄其

意（じじょうごい。自らの心を清める）』というの意味深に思えてくる。何か世界の深層に繋がるマジックがあるような、ね。

それはあまりにも楽天的な空想だが、しかし僕が思うに、少なくとも意志というものはビッグバンに繋がっている。

疑うならば、僕らの脳を見ろよ。そこには進化の過程がある。大脳の下には馬の脳があり、その下には爬虫類や両生類や魚の脳がある。諸概念はけして理論の産物ではない。生命の感覚の累積によって歴史的な堆積として生まれているのだ。それは恐らく生命の時代を超えて無機質の時代、エネルギー態の時代、そしてビッグバンに繋がるだろう・・・と僕は空想する」

「結局、詩的なんだな」

「そうだね。夢想を止めることはできない。生存への執著があるうちはね。でなければ人類史に詩なんて生まれないさ。

死のふちに立ったアンドレイ公爵のように、死の直前になって価値観の何もかもが生活への意欲が做り為す幻想であったと覚るまではね」

「君は厭世家なのかどうなのかよくわからないね」

「僕は強い肯定家さ。龍の如く神的で、理不尽で、理窟を越えている。龍のごとく肯んぜよ、と言うではないか。

これも気概さ。神の領域に魂魄を以て参入する気概さ。この精妙を会得してレシピの達人になりたいんだ。そのためには現実というものに直参しなければならないだろう。これを理論的に会得することができないからだ。生きた現実のその場その場で妙機をつかむ。こういう奥義を僕は神妙と呼ぶ」

「わかった。また君の説を拝聴する機会があることを望むよ」

「そうだな。運が良ければ復た会おう。そういう意味では平和もいいものだね。無駄で善い。生きるしかないから生きるんだ。誰であっても死を望むようには創られていない。そんな存在はない。あり得ない。だがいずれは死ぬのさ。生き、そして死ぬんだ。人生への否定でも肯定でもない。『喫茶去（きっさこ。お茶でも飲んでいきなさい、の意）』ってことさ。ふ」

「武運長久を祈る。そして君が芸術に専念できる日が来ることをも祈るよ」

「ああ、ありがとう。君もね。真幸くあれ、龍のごとく肯んずる太陽のごとく睿らかに」

会議は再開し、グルームは提議した。賛同者があり、会議の動向は変わった。

数日後、国際連盟の安全保障委員会の諮問機関である国際青年有識者会議は『非』の将来を答申し、侯国はこれを採択した。千人の『非』が渡航した。秘密の渡航作戦は帝国軍艦の妨害にあったが、襲われた帆船は四重のダミーのうちの三重目であった。勇敢な戦士と海兵の命が失われ、家族の涙が流された。父を喪った子は軍に入ることを決意する子もいたし、政治家を目指す者も学者を目指す者も、芸術家を目指す者もいた。

齊暦四五七八年、国境附近に進軍して来た神聖シルヴィエ帝国の『屍の軍団』二十万とスサヴィ侯国正規軍及び大華厳龍国『非』の軍は合戦し、カンネル峡谷で帝国軍を挟撃したスサヴィ側の辛勝となったのであった。

叙勲式がムヒノ・スサブライ侯爵宮殿謁見の間で荘厳に執り行われ、リュージュは中尉に昇進する。親友デヴィル・アスタロテも見えない存在として参列していた。人を魅了して已まない麗美懶惰なる満面の微笑を泛べて……

古い家具の書斎で暖炉の火にあたりながらリュージュは勝利の美酒を傾けていた。オークの木の樽で長い年月熟成された酒精は深い味わい。

「いつ来たんだ」

彼はデヴィル・アスタロテに尋ねた。

「さっきさ。まだ来たばかりだ。最近、気が附くのが早くなったようだね」

唐紅を濃く冥(くら)くしたような深紅の髪で双眸はフレンチ・ブルー。黒いシルクのハイカラー・シャツに漆黒のリングでまとめた純白のアスコット・タイを黒い繻子のベストの上に垂らし、大きなカフスの附いた黒い

ベルベットのフロック・コートの上に漆黒のマントを羽織っている。
黒いロザリオを首から懸けていた。十字架にはブリリアント・カットされた黒に近い紅のダイヤモンドが嵌め込まれていた。黒い手袋の上から嵌めた指輪はブラック・ゴールド。黒い象牙のステッキは球状の柄を握っていると腕の延長のようであった。
「慣れさ。何事もじきに慣れてしまう。繰り返しになる。惰性になる。新鮮な感覚がなくなれば自ずと意味は消失する。意味感覚こそ生きる意味だ。しかし世の中は上手くいかないようにできている。常に飢餓を与え、渇きで焦らし、駈り立てる。それが生存の実態だ。人間はそれに嫌悪を覚えるように創られた。その矛盾が永劫にエンジンを駆動させるガソリンだ。ただ、それだけ。それだけの現象に過ぎない。空疎という概念も概念である以上、空疎だ。まるで自らの尾を咬むウロボロスだ。喰らうのか、喰らわれるのか。いや、喰らい尽くすとしたら、いったい、どういう状態になるのか。永劫に解けない智慧の輪か？　四次元でならいとも簡単か？」
アスタロテは冷たく無表情であった。
「それをおまえに説いても理解できまい。人間は愚かなのに、なぜ問うのか。無駄な時間だ。ウスバカゲロウのような人生だというのに。愚かなこと限りない」
「で？
何の用だ」
「祝福に来たのさ。長い友人だ」
「僕はあなたを友に持った覚えはない」
「おまえの心象として常に私はいた。だからおまえは『悪魔の叡智学』を熱読した。おまえの魂の奥に常に私はいた。だから私は現象するのさ。ふふふ。違うか？」
「そうかもしれない。『あれ在れば彼在り、惟（これ）なくば此れなし』だ。何をどう考えようとも同じことだ。同じというイデアも空架だ」
アスタロテは涼やかな表情になり、遠くを見る双眸でどこか知らない空の彼方を仰ぎ見るように顎を上げる。

「しかしおまえの心象であったからといって、おまえに固有の存在ではない。

数千年前は沙漠の民の精神にいた。もっと昔はアフリカの民の心にいた。松明を持った洞窟のクロマニヨン人の心を過ったこともあるし、ネアンデルタール人の魂にも燻った。原人の胸にも去来したし、ピテカントロプスやアウストラロピテクスの脳髄にも走った。キツネザルやうさぎの脳幹にもいたし、爬虫類や両生類の卵にも宿った。魚の神経を伝わりもしたし、アメーバの分裂にも作用した。海底亀裂から湧く熱水でもあったし、カリウムや硫黄でもあったし、素粒子や光子やクォークでもあったし、反物質でもあったし、時間や空間でもあったし、ビッグバンでもあった。平行宇宙でもあったし、それ以外でもあったし、現在過去未来の一切でもあった。

おまえの心象に私の影があって当然だ。私はおまえに固有の存在ではない。と言うよりも、むしろ、おまえが私によって生じたのだ。いやいや、おまえの創造どころか、現在のこの瞬間が宇宙の起源であってもおかしくない。宇宙開闢以前は時間がなかったのだから。いま現在、私の陀羅尼から宇宙が遡って生じたと言ってもおかしくないのだ。すなわち現在が原因で過去が遡って生成された、と言ってもな。夢想が原因で夢想する者が生じたというわけさ。ふふふ」

「もうわかったよ」

「よって私が他の人間の前に現われることも当然ある」

「だろうね」

「先般はイヴィルに会って東大陸(エステ)大華厳龍国との密約を勧めたよ」

「イヴィル？　もしかしてシルヴィエの枢機卿…未だ青年だが、既に魔神と呼ばれる男」

「そうだ」

「バカな。あり得ない。大華厳龍国の王も愚者ではない。毒蜘蛛や毒蛇や蠍と手を結べるわけがない。たちまち咬まれて死んでしまうではないか」

「しかし弱小な北大陸（ノルテ）東南部諸国連盟よりは余程あてになるだろうね。たとえ一時的であっても。

同盟や休戦協定や政略結婚など、そういう類の思惑はけして単純な計算ではない。愛娘を嫁にやっても時には攻め入るし、休戦協定の後に帰国の途に就いた敵軍を背後から襲うこともある」

「なぜあなたはそんなことを敢えてしたのか。そしてなぜいまそれをわざわざ教えるのか」

「ふふふ。そのような問い、すなわちそのような問いを人間の胸中に起こす、あるいは起こさせる（人間の造った）価値基準・判断など私には一切関係ない。そのような地を這う虫のような思考など、おぞましくも醜く、汚らわしい。狭陋で、愚劣極まりない」

「いま我らが東南部諸国連盟の各国に駐在する『非』は民間の傭兵とは言え、実質的に大華厳龍国の特殊部隊に等しい。奴らが敵対行動をすれば家中に賊を招いた結果になる」

「おまえたちは戦争に勝利はしたが、それは短絡的な喜びだ。『非』を招聘した判断は誤りだったのだ」

「あなたが誤りにしてしまったんじゃないか」

「同じことさ。私は自然の一部だ。すなわち運命を運営する運命運営委員会の委員の一人、運命の一部を担う者だ。人間などゲームの中で精々踊るがいいのさ。ふふふ」

「わかった。運命がそうであれば立ち向かうしかない。他のどのような選択肢もない。現実に是非を言っても仕方ない。闘い、そして後は死すのみ」

「では武勲あれ。武運長久を祈ろう。幸いあれ、と」

「あなたの祝福は凶兆と思うべきなんだろうな。ふ。龍のごとく肯んずる爾焉哉（のみかな）」

赫奕たる太陽のごとくそう応えた。

完